

「詩」と「阿呆」と：芥川龍之介「或阿呆の一生」 論一

海老井，英次

<https://doi.org/10.15017/12221>

出版情報：語文研究. 27, pp.77-86, 1969-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「詩」と「阿呆」と

——芥川龍之介「或阿呆の一生」論——

海老井 英 次

芥川龍之介の遺稿「或阿呆の一生」（「改造」昭2・10）は、その原稿に抹消されているが、「自傳的エスキス」の註が記されていたことや、当遺稿中の言及に従って、「彼の一生を象徴的に鳥瞰した見取図」として、芥川論を為すに際して、そこからの引用が従来よく行われていた。しかし「芥川龍之介未定稿集」（岩波書店昭43・2刊）を編まれた葛巻義敏氏から、「

多くの人達は、——この自伝的小説「詩と真実と」から、逆に彼の生活的事実である『伝記』を割り出そうとして、瘦々その滑稽な事実をさえ作り上げてはいはしないか？」と疑問が提出された時、その疑問の当を得ていることも認めざるを得ないので、現況ではないかと思われる。

従来この自伝的性格を持つ遺稿を、一つの作品としてみる立場が確立されないままに、芥川龍之介論の、特に評伝類の骨格として利用されてきたことが、この遺稿と芥川伝との密月的關係を強化してきてしまっていると思われるのである。芥川自身

の言葉⁽³⁾に従ってもこの遺稿が「詩と真実と」を含んでいることの明らかであるにも拘らず、これまでここから問題にされることは、多く「真実」の面に傾いて、「詩」の面が等閑にふされていた憾みを憶えないわけにはゆかないのである。本稿は、「或阿呆の一生」論の一部として、この遺稿を「詩」と「真実」の両面から把握する立場を提示する試みとして、芥川が「詩」と表現したものを検討してみたものである。

二

前述の観点から「或阿呆の一生」論を為すにあたって、「詩」と「真実」との二項をたてた場合、その一「真実」に関して、それが何を意味しているかは詳述する必要もないと思われる。それは芥川龍之介の生涯の、可能な限りにおける客観的把握によってもたらされる伝記的事実に他ならない。芥川の生涯の流れの中で、「或阿呆の一生」中の記述によって定着される一点において、芥川がどういう人であり、何を考え、何を為していたか、それらをその一点に視点を凝結させることによって

捉えること、それが「真実」に関する考察の全てであるに違いないと思われるのである。

次に「詩」の面は、芥川がこの自伝的作品を書くに際して、「真実」を歪曲したこと——勿論、その事の正否を問うのは別問題として——によって生じたものである。「自傳的エスキス」と彼が言う時の、「エスキス」化作用ともいふべき象徴化の働きかけによって、この作品の中に流れ込んだ诗情である。それは他でもなく、この作品執筆時における芥川の意識の反映なのである。この点に関しては芥川自身が次のようにいっている。

彼は最後の力を尽し、彼の自叙傳を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかつた。それは彼の自尊心や懷疑主義や利害の打算の未だに残つてゐる爲だつた。彼はかう云ふ彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。しかし又一面には「誰でも一皮剥いて見れば同じことだ」とも思はずにはゐられなかつた。「詩と眞實と」と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自叙傳の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。(「或阿呆の一生、四十九、剥製の白鳥」)

ここにはつきりと、芥川にとって「詩」が意識されたものであつたこと、及びそれが生れてくる経緯が記されていると言えよう。「自叙傳」を書こうとした芥川は、勿論「真実」を書こうとしたに違ひないのである。ましてこの遺稿は、芥川が自殺を決意するに及んで、その動機としての「将来に対するほんやりした不安」を解剖する為に、「過去の生活の總決算」として書かれたものであることを考慮すれば、芥川がいかに「真実」を欲していたかは多言を弄するまでもなく明らかであろう。しかし芥川にとって「真実」を文字にすることは「存外容易」で

なく、「自尊心や懷疑主義や利害の打算」などの、執筆時の芥川にわだかまつてゐる自意識によつて、「真実」を歪曲すること、すなわち「詩」を混入することによつてしか、この遺稿の筆が進まなかつたらしいことも既に引用した彼の言葉が明らかにしている。従つて「或阿呆の一生」に於ける「詩」の面は、芥川が言つてゐる「自尊心」その他を残存させてゐる芥川晩年の意識、特にこの作品に対してゐる時点での芥川の現実と思念の考察によつて明らかにされるものと考へる。

以上、作品「或阿呆の一生」を論ずるにあつた必要と思はれる「詩」と「真実」の二面について、その内容の概略を規定したわけだが、それを踏まえつつ、以下具体的な検討に入りたいと考へる。

三

「詩」を論ずるに先だつて、それが前述したような内容のものである以上、まず「或阿呆の一生」の執筆時期を、出来る限り限定する必要があるであらう。

芥川がこの遺稿を託した久米正雄宛に書いた前書の日付、昭和二年六月二十日までには「或阿呆の一生」が、現在残されてゐる形で完成してゐたことはほぼ疑いの余地がない。しかし、可能な限りこの作品の執筆時期を限定したい立場からすると、そこには又新たな問題が生じてくる。というのは他でもなくこの「或阿呆の一生」の中に次のような記述があるからである。

彼はその爲に手短かに彼の「詩と眞實と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後……(四十九 剥製の白鳥)

我々が今接している「或阿呆の一生」は、この後に「五十

俘」「五十一 敗北」の二つの短章を持っている。そして「五十俘」は、各短章についての細述は次稿にゆずるとして、今ここで必要なことだけ言及しておくとするれば、芥川の友人宇野浩二の精神錯乱を核とした記述なのである。宇野の精神錯乱は昭和二年、五月末で、それを芥川が最初に知ったのは六月二日のことなので、この章に仮に日付をつければ昭和二年六月二日（以降）になる。とすれば「或阿呆の一生」を書き上げたという短章「四十九」の記述はそれ以前のことになる。さらにもう一つこの点を推測する傍証として、小穴隆一による次の如き記述がある。昭和二年の「春の一日」のことであるが

僕は机の上のハトロン封筒の表に思いがけなく、小穴隆一君へ、と書いてあるのを手にとって中をみた。封筒の中には「或阿呆の一生」の原稿だけであつた。（同書「帝國ホテル」）

というものであるが、これによれば、昭和二年の「春の一日」に、すでに「或阿呆の一生」は人に託せるものとして書き上げられていたことが推定されるわけなのである。

以上のことから「或阿呆の一生」の成立の過程は、次のように推定することが出来るだろう。

「或阿呆の一生」は、昭和二年「春の一日」までに、現存の「四十六」までの形で一応書き上げられていて、その後六月二十日にかけて「四十七」―「五十一」の五短章が書き加えられ、久米正雄宛前書が付されて、六月二十日に現存の形で完成したものになった、と。又この作品に着手された時期を推定する確たる資料はないが、昭和二年の年頭からの芥川のデータを見る

と次のようになっている。

昭和2年

1月4日	義兄西川豊宅全焼
6日	西川豊自殺
19日	「玄鶴山房」脱稿
2月4日	「蜃氣樓」脱稿
13日	「河童」脱稿
19日	改造社招待歌舞伎
	（この頃「文藝的な、餘りに文芸的な」執筆）
2月27日	改造社宣伝講演会のため、佐藤春夫と大阪へ、この間、谷崎潤一郎を訪ねる。
3月2日	「誘惑」脱稿
7日	「淺草公園」脱稿
14日	「たね子の憂鬱」脱稿
28日	菊池寛宛遺書
4月16日	「古千屋」脱稿
5月7日	東北、北海道へ改造社講演旅行に里見淳と同行。22日以降は単身新潟へ赴き、恩師と会す。
6月2日	宇野浩二の精神錯乱を知り、以後、広津和郎、斎藤茂吉らと、その世話にあたる。
28日	「冬」脱稿
4日	「或阿呆の一生」久米正雄宛前書
20日	これによれば、昭和二年々頭から、「河童」脱稿の二月中旬までは、西川関係の雑事のため、芥川の生活は「多事多難多憂」

「神經衰弱なほるの時なし」の状態で、その「多忙中ムヤミに書いて」いたのが「蟹氣樓」(「婦人公論」昭2・3)、「河童」(「改造」昭2・3)の二作と隨筆「輕井澤で」(「文藝春秋」昭2・3)、「芝居漫談」(「演劇新潮」昭2・3)であった。その後二月末から三月初めにかけて大阪へ赴き、帰京後、シナリオ「誘惑」(「改造」昭2・4)及び「淺草公園」(「文藝春秋」昭2・4)を書き始めたと思われる。さらに前表にある一月六日の事件より、「河童」執筆中に至る彼自身の心象を描いた「齒車」(「文藝春秋」昭2・10)も此頃起筆されたと思われるのである。そして「或阿呆の一生」も、「多忙中ムヤミに書いた」という「河童」等が脱稿した後に、その執筆が始められたとみる蓋然性が強いようである。

従つて「或阿呆の一生」は、昭和二年二月中旬以降、五月初めにかけて稿が重ねられていき、五月末——小穴の「春の一日」が限定しかねるので、最大限の時間的幅をとり——には「四十八死」までの形で完成していたと考えられる。従つてこの期間の芥川の意識こそが、「或阿呆の一生」の「詩」を生む母胎であつたと見て大過はないであらう。

さて、この期間の芥川の生活を、前掲の表を参考に、芥川の思念を中心に概観してみると次のようになる。

昭和二年々頭、義兄西川豊宅が全焼し、次いで西川が自殺した。そのため、二月中旬まではその後片付けのために芥川は東奔西走し、「火災保険、生命保険、親族會議——何やかやゴチャゴチャで弱つてゐる」。しかも「神經衰弱なほるの時なし」で「時々錯覺(?)あり」の身心共に衰弱した彼であつてみれば

「來ム世ニハ水ニアレ來ン軒ノヘノ垂水トナルモココロ足ラフラン」とか「僕もモスクワ大學の日本文學科の先生か何かになりたい。原稿に追はれて暮してゐるよりもその方が遙かによさそうです」との、現実離脱の願望を抱くのも無理はなかつたと思われる。しかしそうした苦境の中においてさへ、彼にとつてはやはり小説を書くこと、「多忙中ムヤミに」書くことが「窮すれば通ず」の道であり、「愉快」なことであつたらしい。

二月末から三月初めにかけて、改造社の宣伝講演会のため大阪したが、その折の芥川の感傷的になつてゐる姿は、谷崎潤一郎によつて伝えられている。

その頃の彼には「ブルジョアたると否とを問はず、人生は多少の歓喜を除けば、多大の苦痛を與へるもの」と思われ、「何かペンを動かし居り候へども、いづれも楠正成が湊川にて戦いをやるやうなものに有之、疲勞に疲勞を重ね」「みづから「くたばつてしまへ」と申すこと度たびに有之候。御憐憫下され度候この頃又半透明なる齒車あまた右の目の視野に廻轉する事あり、或は尊臺の病院の中に半生を了ることと相成るべき乎」と、発狂への恐れも身につまされる現実のものとなりつつあつた。ほぼこの期間の彼の姿を描いたものとして「齒車」があるが、「齒車」に描出されている「地獄よりも地獄的」な姿を、そのまま芥川の実生活とするには問題があるが、しかし、關係妄想によつて自身の周囲に地獄を構築し、現実をあやつる脅迫觀念に替えるその姿は、芥川の体験にその地盤をもつてゐる。そしてこの間、芥川は短章の積み重ねによつて自らの「思想の變化を窺はせ」た「侏儒の言葉」、さらに自身を「或聲」と對話さ

せることによつて自らの正当性を主調した「闇中間答」などを書いており、それらには芥川の考え方、「或阿呆の一生」へと連なつていく思考が如実に示されていて注目されるのである。

すでに「河童」において、「その動物の一匹に僕自身の肖像を描いた」という「詩人トック」を自殺させた芥川は、「遺伝、家族制度、恋愛、失業、ジャンナリズム、戦争、芸術、法律自殺、宗教、死後の名声」などその関心の赴く問題を露呈させていたが、それらは「侏儒の言葉」でも多く言及される事柄であつた。さらに「闇中間答」においても、恋愛、社会的非難、将来の読者、思想、死、罪、父母妻子などをめぐつて問答が行われている。結局、これらの命題はこの頃の芥川には避けることの出来ないものであり、「あらゆるものに對する——就中僕自身に對するデグウから」にしろ、彼の「思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬもの」にしろ、「うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな、これからお前はやり直すのだ」と自身を励ます切なる願いからにしろ、どうしてもそれらに言及せずにはいられない、芥川にとつて切実な問題であつたとみられるのである。そしてそれらの根底には、常に「彼の前にあるものは唯發狂か自殺かだけだつた」との冷厳な二者択一の命題が、彼の選択をうながして横たわつていたのである。そして彼の自意識の中軸は、自己嫌忌に他ならなかつた。

しかも「僕の母は狂人だつた」との自覚をもつ彼にとつて、身心の衰弱の結果、現象として体験する幻視、幻聴の類がいかにか苛酷な現実であつたか、友人の一人の發狂を「何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた」と自らの問題とし

て受容れる姿勢にも、それは充分に窺えるのである。「僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた」と言つてゐる芥川ではあるが、「發狂か自殺か」という二者択一への最後の応答がぎりぎりの形で行われたのは、宇野浩二の發狂した姿に實際に触れた時点であつたと考えられるのであつて、それまでの彼には「死の彼に與へる平和を考へずにはゐられなかつた」と共に、その死が本當に彼自身の上に顯現する以前に、發狂という恐るべき終局が彼に迫つてくる、否、それに向かつて日彼自身の現実が進行していることを認識するおののきがあつたと思われる。

「或阿呆の一生」を執筆している芥川の現実、概略以上のものであるが、そこには何といつても「死か發狂か」という形でしか、自身の未来を予見出来ない身心共に疲れきつた芥川がいる。彼にとつてその現実には「敗北」として意識されているが、その端々な表れが、この自身の「自傳的エスキス」に「或阿呆の一生」と題した、芥川における「阿呆」という自己認識、陥没した自意識にみられると思ふのである。従つて次に芥川が「阿呆」と自身を認識する過程をたどることによつて芥川の認識の陥没——それこそが「或阿呆の一生」における「詩」を胚胎したのであつた——の性格を検討したいと思ふ。

四

かつては「上は柿本人麻呂から下は武者小路實篤に至る語彙の豊富を誇つて」、新現実主義の代表的作家として、その理知的な作風を特色とし誇りにしていた彼であつてみれば、その生

涯を「阿呆」の一生とする規定の仕方がはらむ問題は、それを看過出来ないばかりでなく、この「或阿呆の一生」成立の根底に関わる問題を提起していると思われるのである。

久米正雄宛前書に「どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ」と芥川は註記しているけれども、誰が一体この遺稿の中に笑うべき「阿呆さ加減」を見出すであらうか。しかし、それにもかかわらず、芥川に自身を「阿呆」と観ずる視点が事実あったことも否定出来ないのである。

従つて、芥川による「阿呆」の語の用例を吟味して、芥川の自意識が「阿呆」という形に陥没していく推移を明らかにしていきたいと考える。

大正十五年十二月、芥川は「僕は」（「驢馬」昭2・2）と題する小文を執筆しているが、そこにはまだ「阿呆」と観ずる視点は全然うかがえない。ところが、翌昭和二年になると、芥川は「阿呆」の語を用いるようになるとともに、自身を「阿呆」とする観点を表出してくる。

まず芥川が「あらゆるものに對する、——就中僕自身に對するデグウから生まれました」と言っている「河童」の中で、哲学者マツグの著した「阿呆の言葉」を紹介して、その中で次のような「阿呆」の用例を記している。

A 阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。
B （前略）しかし偶像の臺座の上に安んじて坐つてゐられるものは

最も神々に恵まれたもの、——阿呆か、悪人か、英雄かである。

しかも、これら二つの警句的短章は、遺稿として残されたものの中に、次のようにほぼ同じ形で繰返されているのである。

A 阿呆はいつも彼以外の人々を悉く阿呆と考へてゐる。（「侏儒の言葉」——「文藝春秋」昭2・10）

B 革命に革命を重ねたとしても、我々人間の生活は「選ばれたる少数」を除きさへすれば、いつも暗懣としてゐる筈である。しかも「選ばれたる少数」とは「阿呆と悪黨と」の異名に過ぎない。（「侏儒の言葉」——「文藝春秋」昭2・12）

B' 人生は「選ばれたる少数」を除けば、誰にも暗いのはわかてる。しかも又「選ばれたる少数」とは阿呆と悪人との異名なのだ。

（闇中間答）

A—A'、B—B'の関係をみると、「河童」の中で「阿呆の言葉」として語られたものが、そのまま芥川の「侏儒の言葉」になつてゐるわけで、

「侏儒の言葉」は必しもわたしの思想を傳へるものではない。唯わたしの思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬものである。

との「侏儒の言葉」の序」（「文藝春秋」大12・1）から、「侏儒の言葉」が芥川の思想のまとまつた表出でないまでも、芥川自身の考えの断片的吐露であることに相違ないわけであるから、芥川—「侏儒」の関係にあるわけで、すでに指摘した「阿呆の言葉」—「侏儒の言葉」から、さらに芥川—「侏儒」—「阿呆」の関係にあるといえるだろう。そして、そうした関係成立の背景に、芥川の「あらゆるものに對する」「デグウ」、とりわけ自己嫌惡の念があつたことを指摘しておきたいと考える。

さらにもっと端的に、芥川が自身を「阿呆」としている用例が次のように出てくる。

○僕はベットの上に轉がったまま、「暗夜行路」を読みはじめた。

主人公の精神的闘争は、一々僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だったかを感じ、いつか涙を流してゐた。

○或聲 てはお前は阿呆かも知れない。

僕 さうだ。僕は阿呆かも知れない。あの「痴人の懺悔」などと云ふ本は僕に近い阿呆の書いたものだ。

(「闇中間答」)

以上より、「河童」執筆前後、昭和二年になってからの芥川には、自己嫌悪を基として自身を「阿呆」とする思念があったことは明らかであろう。ところで「侏儒」―「阿呆」と連なっていく芥川の自意識の陥没を検討してみる上で、何よりも我々の関心を魅くのは、すでに引用した「歯車」における「阿呆」の用例であると思われる。志賀直哉の作品「暗夜行路」を読むことによって、「僕」が「阿呆」だったかを感じ「た」というこの記述は、芥川における「阿呆」意識の成立を如実に語っていると考えられるのである。

芥川は昭和二年三月の「改造」に、「文藝的な、餘りに文藝的な」を発表、その「五」に「志賀直哉氏」が含まれている。この稿は同年二月二十六日には書上げられていたので、おそらく芥川はその前に「暗夜行路」を読んだものと推定される。「歯車」の中の時間的推移に従うとすれば、前記の「阿呆」の自覚を描いた節は、義兄西川豊の自殺(一月六日)と、「河童」執筆(二月二日→十五日)との間に、「暗夜行路」を読んでいた為されたことを告げているので、大略前の推定と重なりあうと思われる。このことから、昭和二年一月末に、芥川が「暗夜

行路」を読み、その主人公と比較することによって、自身を「阿呆」と痛切に感じたことが明らかなのではあるまいか。

ところで、「暗夜行路」の主人公時任謙作と比べることによって、芥川に自覚された「阿呆」とは、一体どのようなものであったのか、その点を芥川の志賀観、「暗夜行路」評価を中心に検討してみようと思う。

芥川は「志賀直哉氏」の中で次のように言っている。

志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてある作家の作品である。―中略―志賀直哉氏はこの人生を清潔に生きてある作家である。それは同氏の作品の中にある道徳的の口氣にも窺はれるであらう。―中略―同時に又同氏の作品の中にある精神的苦痛にも窺はれないことはない。長篇「暗夜行路」を一貫するものは實にこの感じ易い道徳的魂の苦痛である。

このように志賀直哉と「暗夜行路」とをみていた芥川は、「暗夜行路」はかう云ふ僕には恐ろしい本に變りはじめた」と告白している。芥川が「かう云ふ僕」と言っているのは、勿論「歯車」に描き出された、関係妄想、脅迫觀念にさいなまれる「地獄よりも地獄的」な生活の中で「かう云ふ氣もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか?」とつぶやいてゐる彼に他ならない。晩年の芥川にとって志賀直哉の存在がいかに大きく威圧的にとらえられていたかは、小穴隆一による紹介のあるところであるが、ここにおいて「道徳的」の語によって志賀理解を告げている背後には、芥川の自意識の反照があるらしいことは、当時の彼をもっとも苦しめていた一女性との情

事のつまづきという事実を傍証として明らかなきことである。芥川は「罪を犯した」非道徳的存在として自悔の念を抱いていたのであり、その点「道徳的」な志賀、情事につまづくことなく自我を貫く時任謙作の生き方は、芥川の現実の彼岸にあったわけであり、それを「立派」とする視点をも有している限り、彼自身の現実の姿が「阿呆」に帰結してしまうのも、当然のことであつたとみななければなるまい。さらに芥川には「僕は養家の人となり、我儘らしい我儘を言ったことはなかつた。(と言ふよりも言ひ得なかつたのである)僕はこの養父母に對する『孝行に似たものも』後悔してゐる」と遺書¹⁰⁾に書かねばならなかつた、その家庭の桎梏があつた。「親子」「家族制度」などについても晩年の芥川は呪詛にも似た多くの言を費しているが、こうした点にも、芥川と志賀(時任謙作)の対極性は明白である。しかも、芥川には「いつ死んでも悔いなきやうに烈しい生活をするつもりだつた」¹¹⁾のに、「黄ばんだ羽根さへ蟲に食はれ」た「剥製の白鳥」の如き、「敗北」者としての自己認識があるのであるから、自身を「阿呆」と感じて涙を流すのもむしろ当然な帰結だつたわけである。厳しい自我の自覚と「精神の平安と自足を全人的に模索する」謙作の生き方を対極として、芥川が自身の冠としたのが「阿呆」の語であつたとすれば、そこに陥没しきつた芥川の自意識の投影がみられるのではなからうか。

五

一方、芥川による「阿呆」の語の用例には、すでに引用したように「選ばれたる少數」として、「悪人」や「英雄」と並べられている場合がある。ここであつた「選ばれたる少數」とは、

彼らにとつてその人生が暗くない者達、人生における破綻を自覚しない者達の意であるから、そうしたものとしての「阿呆」が、芥川がその人生の暗い「敗北」の地平で自覚した「阿呆」と揆を一にしないものであることは、改めて確認しておく必要がある。とある。

芥川と「阿呆」、という形で並べてみた時、我々にすぐ想起されるのは、芥川があつて描いた「神聖な愚人」¹²⁾達である。

「じゆりあの・吉助」(「新小説」大8・9)、¹³⁾「尾生の信」(「中央文學」大9・1)、¹⁴⁾「往生繪巻」(「國粹」大10・4)などの作品の主人公達は、いずれも自身の愚かさにかかわらず、その信念を貫いて殉じた者達であるが、我々の注意を魅くのは、それらの者達に對する、作者芥川の並々ならぬ同感が、いずれの場合にも明らかにされている事実である。

「じゆりあの・吉助」を「日本の殉教者中、最も私の愛してゐる、神聖な愚人」とし、「尾生」の魂こそ「かう云う私に宿つてゐる魂なのである」とし、「往生繪巻」において「五位の入道」の死を描いて、その口に真白な蓮華の開いた描写をした点について、「口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないかと思つてゐます」¹⁵⁾と表明していることにそれは如実に示されているのであるが、芥川にとつて、これら「神聖な愚人」達は、自身の現実(理知的な)からは遠い「愚」という地点で、芥川にとつて憧憬的であつた「刹那の感動」¹⁶⁾を生ききつた者達に他ならなかつた。彼らと對比して芥川の自覚にもたらされるものは、「知」に立脚する者としての優越感とともに、懷疑思想に代表されるその寂寥であつたと思われるのである。

後年の芥川が「最も神々に恵まれた」「選ばれたる少数」として考えている「阿呆」は、この「神聖な愚人」達に短絡するものであったと考えられる。従ってこれは、芥川が彼自身の現実を規定した「阿呆」とは異なっており、「刹那の感動」——瞬間即永遠の生——を憧憬した芥川の観念の一隅に持続された「阿呆」の意であったと解されよう。

僕は他人よりも、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には満足である¹⁰。

と言う時、芥川がいかにかに「神聖な愚人」達から遠く距っていたか明らかなのである。

六

芥川はその「自傳的エスキス」に「或阿呆の一生」の題をつけ、「どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑ってくれ給へ」と言っている。

そして、我々の検討によれば、芥川が自身を「阿呆」とする観点をもっていたことも又明らかであった。しかし、それにも拘らず、「或阿呆の一生」の中に我々が読みとるものは、芥川の「阿呆さ」よりも、比類なく「エスキス」化された生涯を悟っている、一つの魂の震えではなからうか。

「阿呆」という現実的な自覚を有しながら、「僕は他人よりも見、愛し、且又理解した」ことに「満足」している芥川には自恃の思いがあるのであり、そうした彼にとって、自身を「阿呆」とすることは、やはり一つの比喩に他ならなかったようである。従って、芥川にとつて「或阿呆の一生」は、自恃の念に

支えられながら「阿呆」「敗北」という姿で自覚した彼の一生を、その現実引きつけて解剖したもの、換言すれば「ぼんやりした不安」におおわれている彼の現実を、彼の生涯に敷衍させることによって、そこに仮構としての「阿呆」の一生を設定し、さらにそれによって、ぼんやりとした彼の現実の一つのまともった形態を与えるための試みであったと言えようである。芥川文学の一特性である「比喩」という表現形式を駆使することによって、自身の生涯を語ったものであったわけなのである。

従って、この遺稿に含まれる「詩」は——むしろその本質を形成している「詩」は、芥川が自身を「阿呆」とする比喩をその母胎としている。象徴性の問題も、その点の究明から明らかにされるものと考えられるが、それについては、「真実」の面からこの遺稿を検討した上で、さらに言及し、合せて「或阿呆の一生」論として考えよう。

註(1)「四十九 剥製の白鳥」。78 P 参照。

(2)吉田精一博士「或阿呆の一生・歯車」(角川文庫)解説、昭33・2。

(3)(1)と同じ。

(4)遺書「或舊友へ送る手記」(「文藝春秋」昭2・9)

(5)小穴隆一宛遺書。

(6)斎藤茂吉「日記」昭2・6・2。広津和郎「あの時代」(「群像」昭

25・1、2)

(7)小穴隆一「二つの繪——芥川龍之介の回想」(中央公論社昭31・1)

(8)一月二十八日付西川英次郎宛書簡。

(9)一月十五日付伊藤貴憲宛書簡。

(10)二月七日付蒲原春夫宛書簡。

(11)「唯今大いに筋のあるシナリオを製造中」(三月十一日付谷崎潤一郎宛書簡)。

(12)「芥川は『河童』を書上げればもういつ死んでもよいと言っていた」(小穴隆一「二つの繪」—口夫人)。

佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」(「改造」昭3・7)。

(13)二月十六日付佐木茂索宛書簡。

(14)二月二日付斎藤茂吉宛書簡。

(15)一月十六日付斎藤茂吉宛書簡。

(16)一月二十一日付野村治輔宛書簡。

(17)及び(13)参照。

(18)谷崎潤一郎「いたましき人」(「文藝春秋」昭2・9)。

(19)三月六日付青野季吉宛書簡。

(20)三月二十八日付斎藤茂吉宛書簡。

(21)「齒車」

(22)吉田精一博士「芥川龍之介全集第三卷」(筑摩書房)解説、昭33・4

(23)四月三日付吉田泰司宛書簡。

(24)「侏儒の言葉」の序(「文藝春秋」大12・1)。

(25)「闇中間答」

(26)当遺稿「四十九 剥製の白鳥」

(27)「點鬼簿」(「改造」大15・10)

(28)当遺稿「五十俘」。

(29)同(4)。

(30)当遺稿「四十八 死」。

(31)「文章」(「女性」大13・4)。

(32)「他人は父母妻子もあるのに自殺する阿呆を笑ふかも知れない」(小

穴隆一宛遺書)

(33)二月二十七日付滝井孝作宛書簡。

(34)「齒車」

(35)「ああ／君、天下に恐るべきは志賀直哉ただ一人だ。俺はいままで誰も怖れなかった。しかし、志賀直哉に對しては苦しかった」(小穴隆一「二つの繪」)

(36)小穴隆一宛遺書。

(37)同右。

(38)当遺稿「三十五 道化人形」。

(39)平野謙氏「日本文学小辞典」(新潮社昭43・1)。

(40)二月十二日付正宗白鳥宛書簡

(41)「奉教人の死」(「三田文学」大7・9)

(42)同(4)

付記

本稿は、昨年九月、西日本国語国文学会において口頭発表したものに筆を加えたものである。ただし口頭発表の折は、「詩」と「真実」の両面からこの遺稿をとりあげ、「芥川龍之介」或「阿呆の一生」論、として発表したのであるが、今回は、その前半「詩」についての私見をまとめてみたものであり、追って「真実」の面から「或阿呆の一生」を検討した小稿を加えて、作品論として完結させたいと願っているものである。

▼受贈抜刷 昭和43年7月〜12月

現代日本法における時間表現 岸本末彦

大阪教育大学紀要一六